

# 保 育 奉 公

## 大 東 亞 戰 爭 必 勝 完 遂

### 櫻 散 る 春 の 園

倉 橋 惣 三

隣の子であるけれども、あの子の兄が南の海で散華したといふ公報を、きのふその子の母から聞いた先生は、その子の顔を見たいような避けたいような重い心持ちに押されて、けさから自分の組の子をつれて、裏の附屬農園の方で土を耕してゐる。

ぼか／＼とした春の日光を浴びて、子らは大よるこびである。初めは、小石を拾つたりしてお手傳をしてゐたが、やがて、そこらの柔い草を摘んだり、蝶のあとを追つたり、戦時下幼児にのみ許される長閑な世界を現出してゐる。

先生は、子らをもその愉しい世界に任せたまゝ、額を汗ばませて鍬をつかひつゞけてゐたが、どこからか散つて来た櫻の花びらを足もとに見ると、去年の春、母といつしよに東京へ行つて、九段の父を詣でた日のことが、ふと思ひ浮んで来た。

その時である。子らの一隊が大きな聲で歌ひながら、列をつくつて来た。

「召されて征つた空の父

召されて征つた空の兄

.....」

その列の三番目に、頬をまつかにして元氣に歌つてゐるのが、あの子ではないか。

「みんな、いらつしやい」

先生はさういひながら、鍬を投げて置いて、組の子らを引きつれて、その行進のあとへ驅けていつた。自分も一つばいの聲を張りあげてその歌にあはせながら。

(戦時幼稚園小景 四)